

和刻 李長吉詩集 付 書肆・永田謙兵衛

関西大学東西学術研究所が昭和四十二年〔一九六七〕に刊行した大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』を読んでいたら、寛政八丙辰年舶載の書の目録の中に、次の記事がみえる。

— 李長吉歌詩 一部一套

寛政八丙辰年は一七九六年、天皇は光格、將軍は徳川家齊で、中国では清の仁宗皇帝の嘉慶元年にあたる。

江戸の昌平坂学問所が『官板・李長吉歌詩』を刊行したのは仁孝天皇・家齊將軍の文政元年〔一八一八〕で清の嘉慶二十三年である。寛政八年の本は、「一部一套」というところからすると、数冊で一部のものらしく、それならばぶん注のはい、た本だろう。官板の藍本だつたと断定はできぬが、そうでなかつたとも言いきれぬ。大庭氏の研究が收めるのは現存の目録のごく一部分にすぎないやうで、これ以前にも李賀の集が輸入されているはずだが、目録の全部を見ることができないとなんどもいえぬ。

ところで、これらより半世紀早く、和刻の李賀集が刊行されている。慶應義塾大学付属研究所

斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』（昭和三十八年一月井上書房）第三冊に收める宝  
曆四年永田調兵衛刊『新增書籍目録』の

一 李長吉詩集 木質

が七八である。「一」とは一冊本であることを示す。七八にたぶん注のない本であろう。

この目録の與付に次の記事がみえる。

享保己酉歲新撰目録彫刻ナル今年齋藤甲戌マテ二十六歳及フ夫後新刻之書籍日々増シ月々ニ  
多シテ五車萬軸ニ及ントス今ヤ見ニ隨ヒ間ニマカセテ同志ノ友トコレラ据ヒアツメタルニ目  
錄三卷トナルヲ得タリ名テ曰『新增目録』梓ニ彫メ書肆童蒙ノタメニ四方ニツケントス尤書  
題、闕漏且卷數撰者、相違モアルヘキ力四方、君子ヨリ訂正ノ澤ヲ蒙シコトヲ仰ト云而已

作者 文昌軒柴橋

于時寶曆四年甲戌季冬吉良

京都 舊坊 永田 調兵衛

錦小路新町西口入

宝曆四年は桃園天皇・家重將軍の代で、一七五四年、清の高宗の乾隆十九年。享保己酉は十四  
年、中御門天皇・吉宗將軍、一七二九年、清の世宗の雍正七年である。『李長吉詩集』は十八世  
紀前期の四半世紀の間に刊刻されたもの、ということになる。

さて、阿部隆一氏の解説には、

「漫長以来書賣算販」によれば、永田調兵衛は屋号を「丁字屋」などって、代々調兵衛、一

に長兵衛と名乗り、京都錦小路通新町入に竈文彌から開業し、明和の頃花屋町通西洞院西入南側に移り、明治に至るまで続いた老舗で、嘉永頃「文昌堂」を改称したと云う。また「文昌堂」とも名乗ったといふことで、どうして見ると、本目録に「作者文照軒紫橋」と署してあるのは、文昌堂永田調兵衛と同一人ではあるまいか。次の宝曆四年の目録では編者名が「文昌軒紫橋」となっているからである。

花屋町西洞院の文昌堂ならば、わたしは学生のころから時々のぞき、本もよく買った。「明治まで続いた」だけでなく、現在も仏書・経本を出版している書店であるはずである。「丁字屋」という本屋は、別にその近くにあった。丁字屋と文昌堂とがかつて同じだったかどうかは知らぬが、この記事は確かめてみる必要がある。

いずれにしても『李長吉詩集』の版本か、刷った本の一部でも残っていて、見せてもらえたう（昭和辛亥五月六日）

五月十日午後、永田文昌堂に行つた。「永田文昌堂」というのが正式の名称だ。若主人がいた。訪問の目的をのべると、田の銃ぐ、淺黒ぐ、無口なその人が、呪へようと言つてくれたのは、つまりのようないふであつた。

正慶四年の田舎は販売目録である。永田調兵衛が上梓したものはその一部にすぎない。版木や刷った本は明治時代に売ったので残っていない。しかし外出中の父が帰つたら、聞いて電話する。がっかりしたが、とにかく待とうと、汗をふきながら帰宅した。夜、文昌堂から電話があり、老主人の宗太郎氏だつた。手短かに用件を終返すと、

「どうもそれはうちのやないと思いますが、もういっぺん調べてお電話します」  
それも恐縮であり、さしつかえなければ会つて話をききたい、などと、

「ほんなら明日お待ちしまひょ」

### 三

十一日、文昌堂を訪う。店頭にいる人に「昨日はどうも」というと、けげんな表情になつた。たいへんよく似てゐるが、前の日あつた人より目つきが穢かである。名前をいうと中にはいり、老主人が出てきて、住居の方にわたしを導いた。床に鄭孝胥氏の軸がかかっている。

永田宗太郎氏は明治二十六年生れで文昌堂の第十二代。長男は戦死し、昨日あつた人は次男の文雄氏、さきの人は三男島三氏、長女の饒氏は森本家にとつぎ、書家として名をなしてゐる。『目録集成』の解説の一覧を見せる。

「これは間違つてます。もとの『書籍集覧』が間違つてゐるのに、そのままあつちやーーーーに引かれてるんで、かないまへん」という一覧から、書肆「永田調兵衛」の歴史をやゝと聞く。

(五月十四日)

ができた。この話にあとですることにして、『芋長吉萬集』にもどる。

京太郎氏の手許には、『目録集成』にのせる永田調兵衛に間違する目録は、現物、あるいは復写で、みなそなえられ、そのほかに、版木・書籍の売買控えが残っている。それらをひとつづり見せてもらつたが、『李長吉詩集』を著録するのに宝曆四年目録だけである。

宝暦四年目録は、文政氏がいたように、販売目録で、京都中の本屋が「一十六」年間に出版したものと書き上げたので、永田調兵衛上板のものは、いへ一冊。宗太郎氏の話では、調兵衛の上板したものは、仏書が最も多く、和書がこれにつき、唐書・詩集では塾や寺小屋で教科書に使つたような種類の本が多く、他の本屋の版水を引きとつて刷つた特殊なものもないではないが、やゝの控えに見えないと、さからすれば、「李長吉詩集はうちのものやおへんな」とのことである。では江戸や浪速の出版のものも目録にはいつてゐるのかと聞くと、「いや、それは京都で板を起こしたものばかりで、ほかのものはあへん」

それならば、江戸の大学が官板を出す前に、京都の町人が李賀の詩集を上板していたことになる。その町人がたゞかはわからぬにしても。

四

『目録集成』には、宝曆四年目録の次に、明和九年武村新兵衛刊『大増・書籍目録』を收める。

の一条がみえる。「一」はやはり一冊の「一」と「同」は前のほうの条に「董其昌」とあって、それと同じという意である。つまり、明の董其昌が揮毫した法帖で、李賀と王建の詩はそのダシに使われているわけだが、ダシにひかれて董の書を学ぶ人もあつたかもしだれぬ。

この目録の末尾に「明和七庚寅」與付に「明和九庚寅」とあり、庚寅なら七が正しいが、跋文に「宝曆四甲戌年新增目録を彫刻す」とし明和九庚寅年まで十七年に及ぶ」とあるところから、九の方があつたのだろうと阿部氏けい、この目録の編者博古堂南窓は版元武村新兵衛の号で京都二条通新町東入で店をもち、平安人物志（明和、安永、天明）書家之部に「武吉幹、字君貞、号南窓（別号帰一堂）釜塗通二条上ル町、武村新兵衛」とあるのがそれだが、南窓は養子で釜塗の家は特に己のために設けたのだろうという『書齋集覽』の説を引く。

この目録も販売目録であろうから「李長吉王建古詩」の版元がたれかはわからぬが、あるいは書家でもあつた新兵衛であろうか。明和九年は後桃園天皇・家治將軍、一七七一年で、清の乾隆三十七年である。

## 五

書肆永田調兵衛の初代は永田長兵衛である。八幡宮で知られる京都府綴喜郡八幡の、當時川口村といつた地の出身で、後陽成天皇の天正十六年（一五八八）に生れ、慶長年間に京都の錦小路新町西入

（五月十七日）

南側に店を開いた。歴史学研究会編『日本史年表』によれば、慶長元年『補注蒙求』二年『医学正伝』錦繡段『勸学文』『易林本』節用集『四年勅版』『日本書紀』勅版『大學』『孔子家語』六範・三略』五年『貞觀政要』が刊行された、という。豊臣から徳川への政權交代にともなう戦火はまだおさまらなくとも書物の需用はようやく多く、長兵衛はこれを察知したのであろう。かれは長兵衛で慶元天皇寛文十一年(一六八四年)八十四歳でなくなつた。法名祐月道加信士。二代長兵衛は父よりも早く後光明天皇慶安三年(一六七〇年)六月八日に死に行年不詳。法名方屋淨西信士。三代長兵衛尉は明正天皇寛永十八年(一六四一)生れで、二代長兵衛の死んだとき十歳の少年だったから、店のことは老いた初代の長兵衛が見たのであらう。「文昌堂」の名をとどめる記録のも、とも古いものは承応二年(一六四三)だそうである。また「葵屋」の記録の古いものは延宝二年(一六七四)。ただ「葵屋」は町内などつきあいの時にだけ使い、本屋としては「永田」を用いた、といふ。三代長兵衛尉は中御門天皇享保九年(一七一四)六月二十三日八十四歳で死んだ。法名如意祐仙法子(贈居士)。四代目から調兵衛と名のる。寛文四年(一六七四)生れ、享保八年(一七二三)五月二十五日六十歳で死に法名澄岳京仙法子。五代調兵衛は東山天皇寛永四年(一六四七)生れ。十七歳で父に、十八歳で祖父に死別した。『宝曆四年目録』の編者文昌軒柴橋、刊者永田調兵衛は、けだし二人である。享保年間に本屋の組合ができ、京都では上組(北組)下組(南組)があつて、上組の行事(組合)は下組から、下組の行事は上組から出すなつわしだったらしい。五代調兵衛は下組の行事だったのだろう。後桃園天皇永六年(一七一三)月二十七日七十一歳で死に法名べ相似水昌士。六代調兵衛は永田家で中興とする。寛延元年(一七

生れ。天明八年正月の大火で店を焼き、七月、下京の花屋町通西洞院西入、すなわち現在の店のあるところに土地を買ひ、八月にはここに移転した。永田家は浄土宗で、初代長兵衛は息子の一人に命じて八幡の淨土宗の寺福寿庵を再興させたほどだが、花屋町は西本願寺管轄の地でその門徒でなければ住居できないならわしだったので、このとき、淨土真宗慶証寺の担家になったという。東西南北に倉を設け、西倉には本、東倉に紙、南倉・北倉には板木をおいた。以後、十代まで永田調兵衛で本の與付にもそつ記したが、明治二十五年、博文館が出版界を席捲したとき、「永田文昌堂」を店名として與付に記すこととした。板木や本は、店主が市会議員に出たときのみした、といふ。

以上は永田文昌堂第十二代永田宗太郎氏の話をまとめたにすぎない。他に資料を求めれば、傍証するものがあるはずだが、いまわたくしに口ぞの暇がない。

## 六

初代長兵衛が店を開いたところは林羅山・道春の邸宅の向いであったという、永田家には文昌帝の図に柴野栗山・邦彦が文文山の文を賛として記した軸を蔵する。栗山は寛政の三博士の一人である。贊を記したのは天明七年十一月である。永田調兵衛は有力な書肆として、京都の儒者・文人・僧侶はもとより、江戸の昌平齋の祭酒・教官とも交渉をもつたであろう。永田調兵衛のみならず、書肆はみな読書人と交渉をもち、かれらの教示・推薦・依頼と、読書人の需用の傾向を

天秤にかけながら出版計画をたてたであろう。享保十四年（一七二九）から宝曆四年（一七三四）の間に京都の書肆が李賀の集を出版し販売しているということは、それ以前に京都の読書人の間で李賀が評判に上りその集が求められていた、ろくなことを物語る。

石川丈山が洛東一乘寺に凹凸窓を設け詩仙堂を築き、堂の四壁に漢晉唐宋の詩人三十六輩の像を画いたとき、その一人に李賀を選んだ。堂の成ったのは寛永十八年（一六四一）で、二年後の二十年には林羅山が「詩仙堂記」を作り、丈山みずから「凹凸窓十二景詩并序」を作り、元禄五年（一七一二）には尾形乾山がここを訪りて「遍凹凸窓記」を作っている。（小林太市郎へ乾山「遍凹凸窓記」譯注考證）<sup>1</sup> 美術史34・35、一九五九年十一月・一九六〇年二月）丈山や羅山は賀の詩を集で玩読したのであろうか。ともあれそれからほぼ百年、唐山の詩文が争い論まれたのだから、その中に賀の集がまじつてふしきはないはず。ところで、京都で出版された『李長吉詩集』、板木けなくなつたにしても、仕立て上った本の一部や二部くらいは残っていてよさやうだのに、わたしの知る限りでは、それがない。

戦後の約十年、一部の古本屋では、唐本・和本の綴じ糸を切り、紙として売った。和本は紙が強ないのでハンドバックの下地や、マネキン人形の下地になつた。いたましくて、その中からいくらかを買い、つくろっては読んだ。そのうち、急に唐本和本が高くなり出した。外国の大学が、つづいて日本の大学が、買いつぶつたからだ、と聞いた。いずれにしてもわたしの手にあわなかつたが、図書館目録や古書目録はわりあいよく目を通したと思う。その間に、ついに一度も十八

世紀前半の和刻の李賀の集にぶつからなかつた。とはいわだしの見聞などは狹いもので、お話をにならぬ。だが、もしされがもはやどーにもないとすれば、その理由として次のようなことが考えられようか。

一つは、あの目録にのつたのは予告であつて、実際には上板されなかつた。

二つは、上板したが、あまり売れないうちに天明の大火で板木も本も焼失した。

三つは、官板の出たために、私板で注もないこの本が軽んぜられ、保存されなかつた。

もつとも、本は他の物価にくらべて高価であつたうしく、板本が出ても、買わずに寫して持つ人が多かつたようだ<sup>\*</sup>から、第三の理由は薄弱であろう。

和刻『李長吉集』について記す文としては永田調兵衛に筆を多く費した。ただ、わたしの知るかぎりでは、わが国で出た李賀の集の最も古いものを著録してくれた二人を、あろそかにはしたくなかったのである。

(辛亥五月二十九日)

\*わたしのもつてゐる寫本の『李長吉詩集』は天地二冊で、第三巻の終りまでしかない。はじめに「江夏黃光」の序文があり、これが二紙。第三紙には第一行「李長吉詩集第一巻」第二行は「臘西長吉李賀著 莆中若木美光校」とあり、以下、他の本の排次とかわらない。莆中は備中であろう。その若木氏の号ケ名かしらぬが、それが序文の作者の氏名と同じであるところ、筆つきの幼ないところとあわせてほほえましい。第二冊の巻尾に「保子重陽前一日校讎于江都今井邸舍孤燈之下 菊坡園珍藏」と朱書きする。保子は天保十一年八月であろうか。

李

神

通

(下)

武徳二年六二九月、唐の淮安王李神通は慰撫使の張道源に趙州河北省趙県を守らせていた。唐に对抗し夏の國を建てその王を称していた竇建徳は趙州を陥し、唐の張本昂と張道源とを執えた。十月、建徳は勢に乘じて鄭州河南省滌陽市に向った。滌陽をすぎてまもなく李世勣の部下の丘孝剛がひきいる偵察騎馬隊にぶつかり、建徳は孝剛の一撃に敗走し、石翼の部隊が孝剛を斬つたので命を拾った。建徳は怒つて引きかえし滌陽を攻めあとし、李神通と、李世勣の父の李蓋と、魏徵と、帝の妹の同安公主が、捕えられた。李世勣はいたん逃げたが、父が捕縛となつたことを知り、建徳に降つた。建徳は世勣を左驍衛將軍とし滌陽を守らせ、世勣の父を人質としてつわに自分の手許にあいた。魏徵を表居舍人とした。二十四日、洛州にかえった建徳は、万春宮を焼き、「」を都とした。神通を下博河北省におき寄として待遇した。

十一月、李世勣は、王世充を討つて竇建徳に献じ、ややその信頼を得た。武徳三年正月、世勣は洛陽を討つことをすすめ、建徳が軍を率いて河南に向うと、これを討ち人質になつている父を取りもどすつもりだった。「」はうまくつかず、世勣は長安に走った。建徳の臣は李蓋を殺

せどい、たが、建徳は、世勣に唐の忠臣で、その父に罪はない、といつて許した。

八月、唐帝は竇建徳に和議を入れ、建徳は同姓公主を唐にかえした。李神通はひやづき建徳の下におかれた。

武德四年九月、竇建徳は洛陽城にいる王世充をたすけるため、管州、滎陽河南省を陥し、ついで西進した。二十五日、秦王李世民が武牢河南省で二れを迎えうつた。捕えた将校に手紙をもち帰らせ、建徳に唐への帰服を勧告した「雄魏は久しくわが領有だつたが、足下に侵奪された。ただ淮安王は足下のもとで礼遇され、公主は帰ることことができた。だからこれまでの怨みを忘れて好みを結びたい、云々」

五月一日、世民と建徳の軍は汜水で対戦し、建徳は敗れて世民に捕えられた。七日、王世充らも唐に降つた。十日、世民は洛陽の宮城に入った。

二十一日、襄州刺史馮士彊が、唐の淮安王李神通を慰撫山東使に推した。これで夏の三十余州が唐に帰服することとなつた。

七月九日、秦王世民は氣勢に凱旋した。十日、王世充は燕民にあべりて、廻田耕稼にはまつて斬られた。

實建徳が斬られると、唐に降伏した建徳の部下は動搖した。「淮安王が捕虜となつたとき、夏では客として礼遇したのに、唐は東王を斬つた。われわれもやがて殺されるだらう。東王のために仇を報じよう」かれらは漳南にかくれていた劉黑闥を謀主に仰いだ。十九日、黒闥は漳南県を襲い、これに撃つた。

二十二日、淮安王神通は山東道行台石僕射となつた。

八月にはいって劉黑闥は長安の諸州を、ついで笠亭を陥し、ものゝ東の諸州で劉の挙兵に参加するものが増えてくる。九月、李神通は閩内の兵をひきいて冀州にゆき、幽州總監李贊の部隊と合同し、さらに、邢、洛、相、魏、恒、趙などの兵五万をあわせ、饑陽で劉黑闥と戦つた。風雪となり、神通は風に東じて進撃したが、途中で風向が逆になり、大敗して、兵力物資の三万の一を失つた。

武徳五年（622年）春正月、劉黑闥は漢東王と自称し、天造と改元し、洛州を都と定めた。前月、劉討伐の命をうけっていた秦王世民は洛水のほとりまで進み、六十日余討持し、世民自身が劉軍に囲まれ、尉遲敬徳に救われて命をひろつたこともあった。しかし、三月末に劉軍は敗れ、黒闥は同盟を結んでいた突厥に逃れた。四月、山東行台が廃止された。

六月、李神通は、劉黑闥の部下であった徐圓朗を討伐した。圓朗は王世充の部下だったが、洛陽が落ちたとき唐に降り、兗州總管となり魯郡公に封ぜられ、劉黑闥が兵を起すとこれと通じ、その大行台元帥になつて、いた。武徳四年九月、魯王と自称した。

神通が徐円朗を討つて、いるとき、神通の弟の并州大總管襄邑王神符は汾州山西汾陽県で突厥を討ち、これを破つて、いた。

劉黑闥はふたたび勢を盛り返し、十月には行軍總管淮陽壯王李道玄を迎え撃つて殺し、洛州に換り、もとの領有地を全部回復した。

十二月、李孝友ら八人が郡王となつた。孝友は神通の七番目の子である。太子建成のひきいる軍が劉黑闥を討ち、館陶冀州で大いにこれを破つた。黒闥はわずかに百人あまりの従者とともにのがれた。

武徳六年六二三春正月三日、饋州までたどりついたが、黒闥によつて饋州刺史に任せられていた諸葛德威が、黒闥を執え、太子建成のもとに送つた。漢東王劉黑闥は弟の劉十善と共に洛州で斬られた。河北はふたたび唐にかえつた。

二月二十日、李神通がせめていた徐円朗は、長い間の包囲に堪えかね、数騎をつれて逃走し、野人に殺された。これで袁州一帯は平定した。

## 八

太子建成、秦王世民、齊王元吉は同腹の兄弟であつた。父の李淵が天子となり、建成が皇太子となつたころから、この兄弟の間の感情が合わなくなりはじめていた。『旧唐書』『新唐書』

れに『眞治通鑑』もいくらかの保留をつけてではあるが、建成と元吉とが悪人であり、正義の人世民の功をわだんでのことであつたよう記す。それを轉々にする人が多いが、今日ではさすがにその不自然に氣づき、建成・元吉のために辯ずる史家も出ている。兄弟についてはそれらの論説にまかせておいて、李神通にかかるところだけめき出す。

秦王世民が洛陽を平定したのち淮安王神通に功があつたので数十墳の田を与えた。「この田を、高祖の愛する張婕妤の父がほしがり、婕妤がせがんだので高祖がみずから婕妤の父に与える旨の勅を書いた。神通は、秦王から貴った書付をたてにとつて譲らぬ。婕妤が「勅によつて父にいだだいた田を秦王が奪つて神通に与えました」と訴えるので、高祖は世民をよびつけ「おれの手勅もお前の書付に及ばんのか」とせめた。

「李孝同碑」の伝える次の挿話は、武徳七年か八年のことであろう。

神通の第四男である孝同は、秦王世民の部下に配属されていた。ある日、孝同に父にいた。「秦王どのは、田つきが非凡で功績も甚大です。世嗣ぎの方ではないが、きっと帝位におつきになるでしょう」

神通は、なるほどと思い、孝同に命じて贈り物をととのえ臣下としての禮をどうせた。

武徳九年六月一日、太子の建成が夜宴をひらき、世民を召し酒をのませた。世民けにわかれに腋に刺痛をおぼえ、数升の血を吐いた。同席した神通は世民をたすけあこして西宮の承乾殿につれ帰り看病した。高祖は西宮に世民を見舞い、「お前たち兄弟が、こう仲が悪くてけ、いつ

しょに都にいるのはじた、いたのもどだ。お前は洛陽につき、陝州以東はお前の管轄とするがいい。漢の梁孝王の故事にならって、お前に天子の旗の使用を「うるすから」。世民は涕泣して、天子の膝下を歸れたくない、と一ひとわった。

四日、秦王世民は長孫無忌等をひきいて宮城に入り、北の玄武門に兵を伏せ、太子建成・齊王元吉がはいってくるところを討つて首級をあげ、尉遲敬德を高祖のもとにやって終始を報告させた。高祖は蕭瑀・陳叔達の義をいれて、世民を太子とし、国事を委ね、諸軍を世民の指揮下におくこととした。三十八歳で死んだ建成には五人の、二十四で死んだ元吉にも五人の、子どもがいたが、いずれも連坐して殺された。いわゆる玄武門の変である。

八月八日、高祖は天子の位を太子世民に譲り、九日、世民は帝位についた。太宗である。

九月二十四日、太宗は勳臣の功績をきめ発表した上で、不満のあるものは言うがいい、といつた。將軍たちの間からたちまち不満が続出した。淮安王神通がいう。「わたしは關西で兵を挙げま、先に義旗にだじたものです。いま、房玄齡や杜如晦のような机の上で線だけ引いてきた連中の功績が、わたしより上だとは、ちど承服できませんね」太宗がいう「わたしたちが義軍を起したとき、叔父さんはまっさきに兵を挙げた、とはいっても、まあ、隋の官吏につかまらないめの算段。蕭建徳が山東を侵略したとき、叔父さんの軍隊は全滅、劉黑闥が殘党を糾合したときは向い風をくつて逃げた。玄齡らは國策を計画し國家の安定を実現した。論功行賞で叔父さんより上になるのは当然。叔父さんはわたしのも、とも近い親戚だ、わたしは物惜しみはせぬ。しかし